



《東照宮・下神庫》51.3 x 34.4 cm / 水彩 紙

は栃木県尋常中学校に入るが、1年で退学し、日光へ戻る事となった。学校での成績は首席だったと伝えられている。時期を同じくして放菴は、水戸出身の五百城文哉に「絵をやらぬか」と勧められ、内弟子となる。五百城は高橋由一の私塾「天絵楼」で絵を学んだ洋画家。1893（明治26）年に開催されたシカゴ万国博覧会に出品する『日光東照宮陽明門』を描く

ために日光を訪れ、この地を気に入ってそのまま住み着いたのである。師の下で絵を学ぶと言っても、モデルを雇ってデッサンをしたわけでも、石膏像があったわけでもなかった。五百城は西洋の名作の複製画を放菴にひたすら木炭で模写させるだけだったが、この時の教えによって、描写力が養われたと言っても過言ではない。なお、五百城は、常々日本古来の精神を重んじ、西洋からの優れた知識や技術などを吸収して両者を調和させる「和魂洋才」の精神を放菴に教えていた。そのことが、洋画家であり、日本画家でもある画家・小杉放菴という人物の形成に大きな影響を与えたと言えるだろう。油絵に日本的要素を含んだ表現を試みたことなどがその例として挙げられる。

《神橋》34.0 x 50.9 cm / 水彩 紙



## 日光に生まれ育ち、 画家という夢を抱く少年。



小杉放菴は1881（明治14）年12月、栃木県上都賀郡日光町山内（現・日光市）で、二荒山神社の神官であった父・富三郎と母・タエとの間に六人兄弟の四男として生まれた。本名は国太郎。放菴が3歳の頃、国府浜西太郎の養嗣子となり、南画家の祖父・煙崖から絵の手ほどきを受け、武者絵を盛んに描いた（1901年小杉家に復籍）。また、実父・富三郎からも、『唐詩選』『三体詩』『古文真宝』などの素読を教えられるなど、幼い頃から東洋の文化が身近にあった。

1887（明治20）年に日光尋常小学校に入るが、長兄の彦治が宇都宮市に住んでおり、付属小学校の訓導をしていたため、放菴も2年後、栃木県師範学校付属小学校尋常科に転入する。1895（明治28）年に